論文審査の結果の要旨

氏名　渡邊 美知子

本論文は「Features and roles of filled pauses in speech communication」と題し、日常の話し言葉に頻出する言い淀み、特にその中でも「エート」,「アノー」などのフィラー（filled pause）が、音声コミュニケーションに及ぼす影響について、実証的な研究を行ったものであって、全 6 章からなり、英文で書かれている。

第１章は「Introduction」であって、まず、フィラーなどの言い淀みが日常の話し言葉に多く頻出することを実例で示した後、それにもかかわらず、現在までの言語学では、人間の言語活動として扱われず、研究対象とされてこなかったという問題点を指摘している。欧米では、コミュニケーションの観点から、言い淀みの研究が進んできており、日本語においても定量的な研究が必要なことを指摘している。その上で、本論文ではフィラーに焦点を当てた研究を行うとしている。最後に、論文の章立てを示している。

第２章は「Background」と題し、言い淀みの分類と特徴、それらの発話生成モデルとの関連ならびに聴き手への影響についての先行研究を、フィラーを中心に概観した。言い淀みは、句、節、文などの主要構成素境界ならびに談話の主要な切れ目で現れやすいこと、後続構成素が長く複雑なほど出現率が高いことが明らかにされている。これらの先行研究において提唱されているフィラーの出現率に関する仮説を整理し、「境界仮説」、「複雑さ仮説」の２つのとしてまとめた。これらは、フィラーの出現率が､それぞれ、「境界の深さ」、「後続構成素の長さ･複雑さ」によって高くなるとするものである。

第３章は「Speaker variation in the use of filled pauses」と題し、フィラーの種類と頻度についての個人差を、日本語話し言葉コーパス（The Corpus of Spontaneous Japanese, CSJ）について調べた結果をまとめている。話者の性別・年齢や発話時のあらたまりの度合いとが、講演中の各種フィラーの頻度にどのように現れるかを、分散分析とクラスタリングによって調べた結果、フィラーの分布には、あらたまり度の違いや話者の性別・年齢による偏りがあり、話者のフィラー選択にはこのような社会言語学的要因が影響していることが示唆されたとしている。

第４章は「Speech planning and filled pauses」と題し、第 2 章で示した境界仮説と複雑さ仮説を、フィラーの出現率の分析をもとに検証している。まず、日本語の副詞節を主節からの独立度の高さの順に A, B, C の 3 つに分類した上で、副詞節と主節との境界の深さもこの分類に対応して、A 類と主節の間（A 類節境界）、B 類と主節の間（B 類節境界）、C 類と主節の間（C 類節境界）の順に深くなるとしている。ここで、A 類は主節と独立した主題･主語を取ることのできない節、B 類は主節と独立した主語を取ることができるが独立した主題は取ることの出来ない節､C 類は主節と独立した主題･主語を取ることのできる節である。境界仮説では、フィラーの出現率は A 類節境界、B 類節境界、C 類節境界、文境界の順位高くなることが予測されるが、その予測を CSJ について検証している。次に、複雑さ仮説の検証のために、フィラーの出現率と後続節長（語数）との対応を、同じく CSJ について境界の種類別に調べている。その結果、両仮説とも節境界において支持されるが、出現率との対応関係は境界の深さの方が強いことが分かったとしている。なお、文境界については、接続詞の存在が結果に影響していると考えられる。

第５章は「Effects of filled pauses on listeners' expectation about the upcoming speech」と題し、聴き手に

よる後続発話内容の予測にフィラーの存在が影響しているかどうかを、日本語母語話者と非母語話者（中国語話者）を対象に、聴取実験により調べている。コンピュータ画面に、単純な図形とそれらに2 本の矢印がついたより複雑な図形を提示し、被験者が言及された方を選択するのに要する時間が、フィラー「エート」の存在によってどのように変化するかを調べた。フィラーがあると、聴き手は複雑な図形の描写が続くことを予測し、その結果、複雑な図形の描写がフィラーに続いた場合、フィラーがない場合に比べて反応時間が短くなると想定される。一方、単純な図形の描写が続いた場合には、反応時間の短縮はおきないと想定される。日本語母語話者を対象とした実験では、この想定が支持された。非母語話者を対象とした同じ実験では、日本語熟達度が上昇するにつれ日本語母語話者と同様の結果が得られ、フィラーを後続句の内容予測に用いるようになることが示されたとしている。

第６章は「Conclusion」であって、本研究で得られた成果を要約するとともに、将来の研究の発展について展望している。

以上を要するに、本論文は、従来の言語学研究では、ほとんど扱われていなかった話し言葉におけるフィラーを研究対象とし、まず、生成面からフィラーの分布について、種々の要因との関係を詳細に調べることにより、フィラー生成に関する仮説を検証し、次に、知覚面から、フィラーと音声理解にかかる時間との関係を調べ、音声理解におけるフィラーのポジティブな役割を実証したものであって、言語学、さらには、音声認識の高度化、対話システムの設計などの将来的な音声言語情報処理の発展に大きく寄与したものであり、情報学の基盤に貢献するところが少なくない。

よって本論文は博士（科学）の学位請求論文として合格と認められる。